

## 事業報告 2005年度(平成17年度)

### <全体>

JICAの草の根協力事業により、マンニャン人間開発センターの家屋がほぼ完成、8月には念願の引っ越しが完了した。人材面でも日本人インターン生二名(森崎由季、森川悠太)を含む10名のボランティアが医療、教育、農業と幅広い分野で活躍、ハード、ソフト面ともに躍進の年となった。

懸念材料もあった。これまで比較的平和であったサンタクルス郡で何度が国軍とNPA(新人民軍)との小競り合いがあり、アムナイ川(2005年2月~6月)、パグバハン川流域(2006年3月)に軍部が進攻し、アムナイ川流域で進める識字教育事業を一時中断せざるを得ない、といった事態も起こった。今後來年の総選挙に向けて治安の悪化が予想され、十分な警戒が必要である。

### <事業地と受益者>

下図は、過去1年における協会受益者の一覧である。中にはサブラヤン郡の集落も含まれているが、サンタクルス郡のマンニャン人口を8000人とすると、協会事業がいかにマンニャン社会に浸透しているかがよくわかる。特に医療支援を求めて訪れる患者数は過去1年激増し、月平均延40件以上の訪問があった。その背景には、マンニャン集落でのマンニャンスタッフ常駐による識字教育事業、農村開発事業の影響が大きい。

部族	地域	地名	世帯数	奨学生数	識字児童	患者数	結核患者	マイット
アラガン	アムナイ川流域	パクパク	9	1	10	30	4	正
		マカトリオ	26		16	11	2	正
		マンガハン	38	1	26	17	2	正
		ソアカン	12	1		4	2	正
		カナルアン	26			9	2	正
		カマンブガン	32	2	26	13	1	正
		カハナハアン	20			5	2	
		カルハアン	20			1		
		マエバ	30	2		28	1	賛助
		ハヤハサン	25			9	2	賛助
		バルゴ	30			3	3	
		アホラホガン	25			1	1	賛助
		リバゴン	30	2		3	1	
		バンドゥルカン	20			3	1	
		バクラヨム	25					賛助
ポーラ	川流域	ウラグアン	40	1				
		シリ	10	3		4		
イラヤ	パグバハン川流域	カラミンタオ	46	15		21	1	
		計	464	28	78	162	25	

\* 患者数は、病院への付添を伴った患者の場合のみ。

\*\* 結核患者は協会が治療完了までモニタリングを行った患者の数。

\*\*\* マイットはアムナイ川人間安全保障会議のニックネーム。

## <主な成果>

### ➤ AALPP (アムナイ川流域識字教育推進事業)

国軍の進攻による一時中断はあったものの、パクパクとマンガハン村での識字教育は安定した運営を行うことができ、生徒数も倍増した(2校約50名)。また、コミュニティの中心として機能し、識字教育スタッフのリーダーシップが十分発揮された。

### ➤ アムナイ川流域人間安全保障会議

地域でマンニャン族の人権、土地、文化を脅かすタガログ人の不法行為に立ち向かうため、マンガハン、カマンブガン、パクパク村を中心に計8つの集落がグループを結成(マイット)、団体で不法行為に対する陳情を行うなど、活発な運動を行った。

### ➤ 結核撲滅キャンペーン

国の進める結核撲滅事業を物理的、社会的に疎外されているマンニャン社会に浸透させることが目的である。日本人インターン生が中心となって、郡や州の医療機関と協議を重ねた結果、協会と医療機関との役割分担、プロセスの合理化が実現した。また、協会ボランティアスタッフの医療支援スキルも大いに向上した。

## <その他(基本事業より)>

### 奨学金事業

2006年3月Mila Panagsaganが情報処理系(computer science)の学科を卒業、協会で4人目の高等教育卒業生(大学、職業訓練校含)となった。他の大学生についても、助産婦コース専攻1名、教育2名の3名共順調に進級しており、将来の識字教育員、医療担当員としての期待が高まっている。ハイスクールも1名の卒業生を出した。

公文フィリピンの好意による無料教材支給による指導の効果もあり、中小の奨学生の集中力、やる気も向上している。3月末現在、ハイスクール生15名、小学生6名の無事進級確定、例年になく欠点保有者、落伍者が少なかった。

### 各種職業訓練

人間開発センターは、男子ボランティア延8名が訓練生として施工にあたり、基礎技術を習得した。その他にも、合鴨農法、パーマカルチャー農場の運営訓練、女子による洋裁、調理訓練などが行われた。こうして獲得された技術、能力あるいは成果物は、個人の生活レベルを向上させるのみならず、協会奨学生の毎日の食材として、また、マンニャン集落における学校建設、農業指導をとおして広くマンニャン社会に還元されるものである。

### アドボカシー

事業地及び受益者の広がりからもあきらかなように、協会の地元での社会的役割、期待感はふくらむ一方である。現在現地理事川寫はサンタクルス郡の開発委員会委員、開発資金監視委員会委員に選ばれており、その他にも世銀のすすめる貧困撲滅基金事業への参加要請などあとをたたない。資金探しではなく、政策面での発言権を伸長させたいところである。